

【学位論文審査の要旨】

本申請論文は、終末期にある患者に対する身体接触を用いたかかわりのプロセスを、構成主義的グラウンデッド・セオリーを用いて明らかにした研究である。

研究参加者は 30～60 代の認定看護師及び専門看護師合わせて 11 名であり、終末期医療の臨床実践において印象に残っている身体接触場面について、一人につき 2 回の半構造化インタビュー調査からデータが収集された。データから 63 の初期コードが生成され、意味の類似性に基づき 24 の焦点化コードがグループ化された。さらに、そのグループを最も象徴する概念を 6 つの理論的カテゴリーとして抽出した上でプロセスを構築し、理論の生成に到っている。そのプロセスは担当患者に関心をもちかかわる《苦痛に気づく》ことを起点とし、患者の抱えている苦痛を受け止め責任をもって《苦痛に応じ(る)》、その上で身体接触の有無にかかわらず患者の《苦痛を分かち合う》ための実践を作り上げていた。こうした行動の背景には、患者主体となるケアを提供しようとする看護師の《倫理的対話姿勢》があり、さらに自身の行為が患者のケアにつながったのか《行為を省察する》ことで、次のかかわりにつなげ、これを繰り返すことで《患者と自己の理解が深化する》に到るプロセスであった。

終末期医療における患者が抱える全人的苦痛に対し、一般に無意識下で反射的に行われていると思われがちな身体接触を用いたかかわりを、看護師の能動的な行為として捉え、シンボリックな相互作用として、実践者の語られる経験から可視化し、構造化した点に本研究の独創性がある。また、身体接触という文脈依存性の高い現象を、一つの理論として可視化したことの意義は高く、凶らずともコロナ禍により看護師が患者に触れることが許されない臨床現場において、逆に触れるケアの重要性が叫ばれている現下において、こうした知見を示したことは、時宜を得た研究とも言える。さらに提示された理論は、本論で申請者が述べている通り、看護師自身の存在を道具として用い、触れることによる相互作用によって、患者の理解と関係性を深めるという看護独自の方法論の一端を明らかにしたものであり、看護学の発展に寄与するものと考えられる。

論文審査会においては「一人につき 2 回のインタビューを行ったことの意味と意義」、「通常のグラウンデッド・セオリーと異なる初期コードを中心に論述したことの理由」、「データを文脈から切り離したことのメリットとデメリット」、「プロセスを示す結果の中に『身体接触がもたらす意味』が含まれている理由、さらに「申請者自身が身体接触の研究手法のパラダイムを博士前期と博士後期の学位論文で大きく変えたことの意味」等について問われた。また改めて「この研究の新奇性、及び看護学への貢献」等についても確認された。これらについて申請者からは、分析過程における試行錯誤や苦悩した点も含め、真摯かつ丁寧な回答が得られ、その内容は概ね理解が得られるものであった。また理論構築に関する分析の記述について指摘された事項については、今後の課題として理解が得られた。一方、公聴会では「本研究におけるケアリングの定義と 4 つのフェーズとの関連」、「理論カテゴリー『患者と自己の理解が深化する』が意味すると

博士学位論文審査の要旨

ころと生成された根拠」、「本研究結果がシャーマズの解釈主義的理論に立脚しているが故に、今後この結果をどのように読み手に還元していくか」等について質疑がなされた。申請者からは文献検言寸や分析過程から真摯な回答が得られ、また今後の課題についても言及された。

以上のことから、本申請論文は博士（看護学）の学位論文に相当する水準にあり、学位申請者は博士（看護学）の学位を授与するにふさわしい専門的知識と能力を備えていると判断した。